

雄物川町十三塚遺跡出土の弥生土器

島田祐悦^{*1}・根岸 洋^{*2}

I はじめに

雄物川町十三塚遺跡出土の土器2個体は『秋田県の考古学』(奈良・豊島1969) や『考古学ジャーナル』No.166 (橋1979) などで紹介されていることから、古くから認知されている弥生土器である。この2個体は、現在雄物川町有形文化財として雄物川町郷土資料館に展示されているが、この他にも小ケース5個分の破片資料が収蔵庫に保管されていた。

今回の報告は、次に述べる一連の経緯による。平成16年2月に横手市史編纂予備調査のため、富樫泰時氏が十三塚遺跡出土の弥生土器を調査した際に、この土器群の重要性と破片資料の復元の必要性を島田に提示した。平成16年度に入り、島田が資料館の展示資料の見直しを行った。小ケースの資料を選別し、破片資料の復元も行い、球胴甕など2点が新資料として確認され、この土器群を常設展示へ移動した。一方、根岸は何回か来館し、復元した甕や破片資料の全てを実測した。根岸はこの甕をはじめとする十三塚遺跡出土の弥生土器の重要性を鑑み、島田と協議し今回の報告を行うこととなつた。^(註1)

(島田)

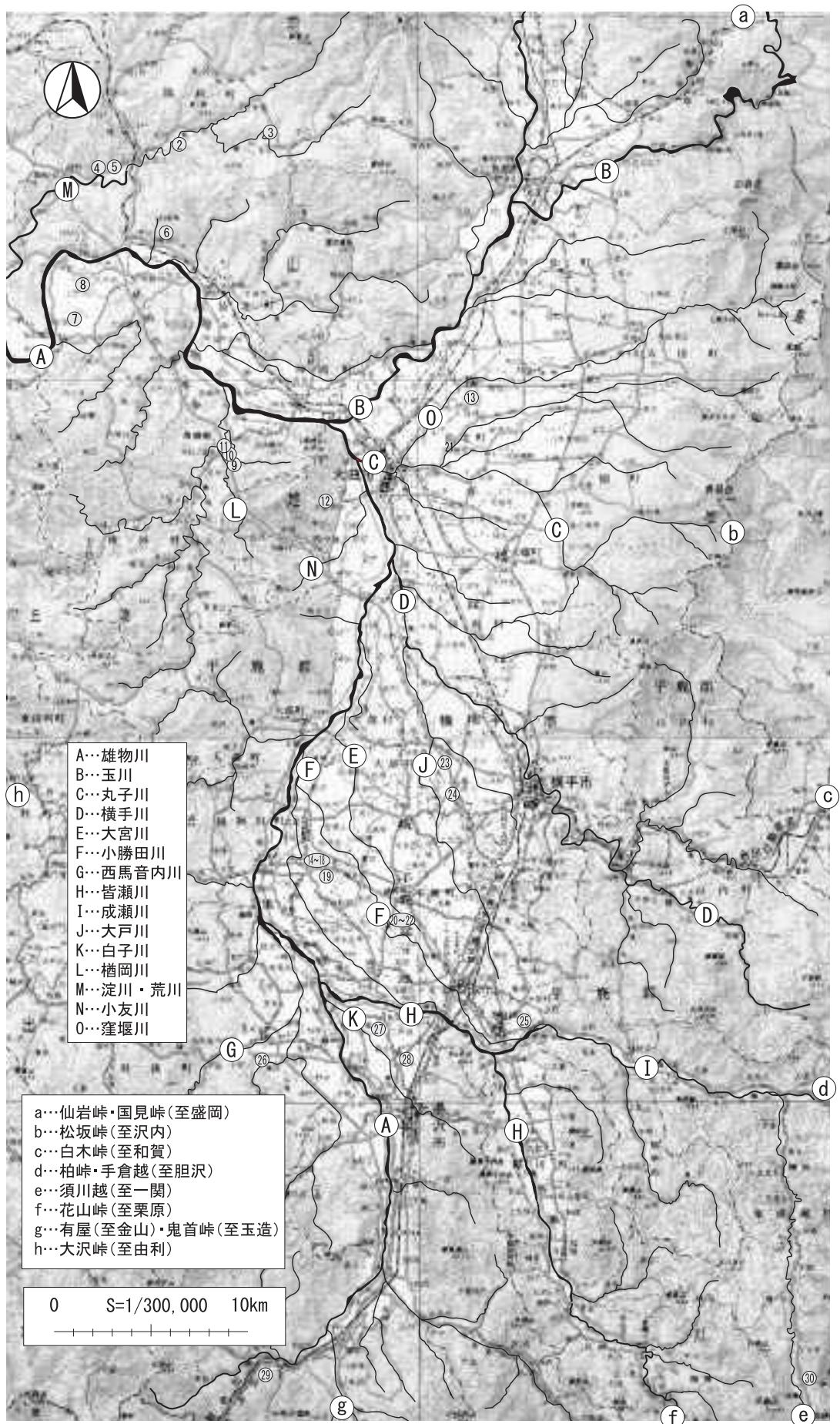
II 横手盆地の弥生時代の遺跡概略

横手盆地で確認されている弥生時代の遺跡は、岩屋山・上野崎・番屋沢・五百刈田・和田・中沢(旧協和町・現大仙市)、上ノ台VI・上ノ台X(旧西仙北町・現大仙市)、小出I・小出II・小出IV(旧南外村・現大仙市)、宇津ノ台(旧大曲市・現大仙市)、星宮(旧仙北町・現大仙市)、十三塚I・十三塚II・十三塚III・廻館I・廻館II・柄内(雄物川町)、平沢II・中都・鳥越森(平鹿町)、手取清水・上猪岡(横手市)、平鹿(増田町)、横枕I(羽後町)、捨上・木津根崎I(湯沢市)、岩井堂洞穴(旧雄勝町・現湯沢市)、野田(旧皆瀬村・現湯沢市)の30カ所に及ぶ(第1図・第1表)。

発掘調査が行われた遺跡は、大仙市の岩屋山(長山1969)・五百刈田(谷地1990)・和田(高橋学1991)・小出I(高橋忠彦1991)・小出II(同1991)・小出IV(同1991)・星宮(小西1999)、横手市の手取清水(大和久1974・船木1990)・上猪岡(武藤1991)、増田町の平鹿(児玉1983)、雄物川町の柄内(島田2005)、湯沢市の岩井堂洞穴(山下1969)などの12カ所で、さらに遺構内資料となると、和田遺跡SN07焼土遺構、小出I遺跡SI04竪穴住居跡、上猪岡遺跡SI84竪穴住居跡・SR03土器埋設遺構、平鹿遺跡SK077土坑、手取清水SK133土坑などの6カ所に過ぎない。

次に遺跡立地を概略する。横手盆地では2地域にまとまる傾向があり、それは雄物川中・上流域の支流と横手盆地から秋田平野に抜ける雄物川流域筋とその支流である。雄物川中・上流域の状況は、雄物川支流の成瀬川から小勝田川に至る筋に平鹿遺跡(25)・中都遺跡群(20~22)・十三塚遺跡群(14~18.19)が、横手川支流の大戸川沿いには手取清水遺跡(23)・上猪岡遺跡(24)が、雄物川支流の白子川沿いに捨上遺跡(27)・木津根崎I遺跡(28)がある。横手盆地から秋田平野に抜ける雄物川流域筋の状況は、雄物川支流の柏岡川沿いに小出遺跡群(9~11)、雄物川支流の淀川・荒川沿いには上

*1 雄物川町郷土資料館学芸員(元:秋田県埋蔵文化財センター研修員) *2 東京大学大学院



第1図 横手盆地の弥生遺跡位置図

No.	遺跡名	市町村名	立地	発掘調査	秋田県遺跡地図・市町村史・報告書の記載から
1	岩屋山	大仙市協和	丘陵地・洞穴	○	弥生土器片、石鎌（アメリカ型）図示は無し。
2	上野崎	大仙市協和	丘陵河岸段丘	×	弥生式土器。
3	番屋沢	大仙市協和	丘陵地	×	石鎌（アメリカ型を含む）。
4	五百刈田	大仙市協和	丘陵河岸段丘	○	弥生土器片（前期・後期）。
5	和田	大仙市協和	丘陵河岸段丘	○	焼土遺構1基。（広義の天王山式）。
6	中沢	大仙市協和	丘陵河岸段丘	×	弥生（天王山式類似）土器片、石鎌（アメリカ型含む）。
7	上ノ台VI	大仙市西仙北	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（志藤沢併行）、石片。
8	上ノ台X	大仙市西仙北	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（志藤沢併行）。
9	小出I	大仙市南外	丘陵河岸段丘	○	遺構無し。弥生前期。
10	小出II	大仙市南外	丘陵河岸段丘	○	遺構無し。弥生中期。
11	小出IV	大仙市南外	丘陵河岸段丘	○	竪穴住居跡1軒。弥生前期。
12	宇津ノ台	大仙市大曲	丘陵地	×	弥生式土器。
13	星宮	大仙市仙北	盆地河岸段丘	○	弥生土器。水田跡（時期不明）。
14	十三塚I	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（中期～後期）。
15	十三塚II	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片。
16	十三塚III	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片。
17	廻館I	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器（後期）完形2個体。
18	廻館II	雄物川町	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（前期）。
19	柄内	雄物川町	盆地河岸段丘	○	遺構無し。弥生中期。
20	平沢II	平鹿町	盆地河岸段丘	×	弥生中期。
21	中都	平鹿町	盆地河岸段丘	×	弥生中期。牛頭遺跡と同遺跡。
22	鳥越森I	平鹿町	盆地河岸段丘	×	弥生中期。
23	手取清水	横手市	盆地河岸段丘	○	弥生前期～後期。
24	上猪岡	横手市	丘陵地	○	竪穴住居跡1軒・土器埋設遺構1基。弥生前期。
25	平鹿	増田町	扇状地	○	土坑1基。弥生前期。
26	横枕I	羽後町	扇状地	×	弥生土器片。
27	掻上	湯沢市	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（志藤沢）、石器類。
28	木津根崎I	湯沢市	盆地河岸段丘	×	弥生土器片（常盤式）、石鎌（アメリカ型）。
29	岩井堂洞穴	湯沢市雄勝	丘陵地・洞穴	○	弥生土器後期。
30	野田	湯沢市皆瀬	丘陵地	×	弥生土器片（田舎館古型式）。

第1表 横手盆地の弥生遺跡一覧表



第2図 十三塚遺跡群の位置図（ゼンリン住宅地図 1994）

野崎遺跡群（2～5.6）と今回図版上位置を載せられなかった岩屋山遺跡（1）、雄物川中流沿いに上ノ台遺跡群（7.8）などがある。その他では、宇津ノ台遺跡（12）が雄物川支流の小友川左岸約2kmの丘陵地、星宮遺跡（13）は丸子川支流窪堰川沿い、岩井堂洞穴遺跡（29）は雄物川上流沿い、野田遺跡（30）は成瀬川上流沿いに位置する。

遺跡の時期変遷として現在までの報告を参考にすると前期～中期における遺跡は、やや標高の高い丘陵地内に河岸段丘上に多く見られる傾向がある。また中期～後期にかけては盆地内の河岸段丘上で小河川沿いに展開していることが認められる。いずれにせよ、遺跡の分布状況は横手盆地で確認できることから、断絶することなく継続的な弥生時代の変遷が想定される。

（島田）

III 秋田県内の弥生土器編年について

東北地方の弥生土器編年について体系的にまとめたのは須藤隆氏である（須藤1998；第2表）。主に青森県・宮城県を中心に組まれた編年案であり、資料の不足している秋田県域は断片的な遺跡名があげられるに止まっている。また氏の3期区分案は近畿地方に合わせる広域編年を意識したものであったが、近年、東北地方における遠賀川系土器の年代的位置の検討によって、須藤氏の前期2（a・b）期を中期初頭に引き上げる広域編年の試み（石川2003・同編2004など；第3表）がある。石川氏は北陸との関連で宇津ノ台式を積極的に取り上げる論者の一人であるが、それ以外の資料群には触れられないままである。広域編年という意味では、秋田県内の資料が使用されたのは1970年代までであり（中村1976）、現在は他県域において資料の蓄積を基に各時期の細分が行われる段階に来ており、秋田県域の資料が寄与する所は少なくなっている。

その主たる要因は二つあると考えられる。まず一つには、男鹿半島～秋田市域周辺における日本海側地域と、十三塚遺跡の位置する雄物川中・上流域の内陸地域とが分断されてきたことである。北陸地方との比較を軸に据えてきた児玉準氏は日本海沿岸地域で段階区分を行っている（1988）が、資料不足からか県南部にはあまり触れない。結果として、いち早く資料提示されていた宇津ノ台（須藤1970b）・手取清水（大和久1974・船木1990）両遺跡において、遺跡内での土器分類案だけが知られるようになっているのが現状である。もう一つは、他地域の土器に類似する土器で段階設定を行う伝統である。個々の土器がどの型式に類似するかは分かっても、それらが在地の編年案のどれに相当するのかを明らかにする努力があまりされてこなかったと言える。岩手県内の土器型式である谷起島式を引き算して設定された志藤沢式（伊東1960）などはその典型であり、未だに谷起島式と伴うのはどの土器なのかが未だ明らかにされていない。結果として、県外の研究者にとって「秋田県の弥生土器」のイメージが湧きにくく、広域編年を行う上で一つの障害になってきたことは否めない。

その一方、県南・県北の土器群を繋ぐ重要性を訴えてきたのは富樫泰時氏である。地蔵田B遺跡の報告書刊行後には前期・中期・後期区分案（富樫1987；第4表）、最近は砂沢式を最古段階のものとする早期案（同2003）の提示を行っている。また十三塚遺跡が立地する横手盆地で、各段階の弥生土器が出土している事をまとめている（同2004）。小地域内における土器編年作業の必要を訴えるものと受け止めるべきである。

今まで蓄積してきた資料をもとに、まず小地域内での編年から始めて県内を総じての検討を行い、在地の土器群の様相を明らかにしていく基礎的作業が求められているといえる。 （根岸）

IV 十三塚遺跡の位置と出土経緯

十三塚遺跡は雄物川町東里字十三塚及び廻館地内にあり、横手盆地南西部の雄物川中流域右岸の約3kmの雄物川より高い段丘上に立地する（第2図）。遺跡は、ちょうど段丘の境界となっており、十三塚I・II・III遺跡が三段高い段丘上で標高は約52m、廻館I・II遺跡が二段高い段丘上で標高は約51mである。北東部に小河川石持川が雄物川に向かい北流し、西側は石持川の名残である河跡湖と思われる池がある。十三塚の地名はその名の通りで、十三基塚があつたと伝承されており大正末年までは3基残存していたが、いずれも開田のため現在消滅している。^(註3)廻館の地名の由来は廻館が中世城館に比定されており、この地が南北150m、東西120mを測り、周囲を石持川の旧河川が廻っていたと思われる（山田1981）。この内側の地名を廻館、外側を十三塚と呼んでいる。

十三塚遺跡は十三塚・廻館十三塚・十三塚I・十三塚II・十三塚III・廻館I・廻館IIと東里十三塚地区に7カ所の遺跡が存在する。この中で弥生時代以外の遺跡は十三塚遺跡と廻館十三塚で、古代の十三塚遺跡は確認調査のみで全体像が不明であるが、堅穴住居跡と平瓦と丸瓦の破片を確認している（島田2003）。廻館十三塚遺跡は上記のとおり鎌倉時代以降の塚跡と思われる。

弥生時代の遺跡は、十三塚I・十三塚II・十三塚III・廻館I・廻館IIの5カ所である。これらの遺跡は第2図で示しているとおり、東西400m、南北240mの範囲内で、宅地造成の際に確認されたものを個別に登録しているが、立地から約96,000m²の範囲が弥生時代の十三塚遺跡として判断して良いであろう。

『秋田県の考古学』・『考古学ジャーナル』No.166などに紹介されている弥生土器2個体（第5図22.23）は十三塚遺跡として広く周知されている。しかし『秋田県遺跡地図（県南版）』（1987）では廻館I遺跡として、この時登録変更しており、その理由は字名が東里字廻館だったとしている。昭和35年、高山氏宅地内の水道管付設工事で、町道側の溝を掘った際に出土したという。隣接の畠地より土器片や石器類、また隣接地より須恵器甕も出土している。廻館II遺跡からは、弥生前期の土器片（第3図1）が採取されている。字名は東里字十三塚地内である。旧名として内配蔵が残る地域で土器に注記され^(註4)ている。

十三塚II遺跡と十三塚III遺跡は宅地造成の際に弥生土器片が出土したと報告されるが現在散逸している（島田1980）。十三塚I遺跡は今回紹介する新資料で、資料館に収蔵されていたほとんどがこの遺跡である（第3図2～第5図21）。出土経緯は昭和38年建築物の基礎工事の際に発見したところで、地下1mほどの間から弥生土器が出土したとする（島田1980）。さらに島田氏の記録と思われる記載が『秋田県遺跡カード』（雄物川町）1～96（1986）にあり、「老人憩いの家」建設につき、基礎盤の地堀りの際に多量の土器片と石造物が出土し、また地下に粗粒層があり、遺物洗浄の際に粗粒と見られるものを発見したとしている。また土層注記も記述され、表土から基盤面に向かい6層をしている。1層が腐植土層、2層に上砂層（表面から約30cmの深さの層）、3層に腐食土層、4層に下砂層（表面から約60cmの薄い層）、5層に腐食土層、6層基盤面で、2層から4層の間で土器片が出土したとしている。

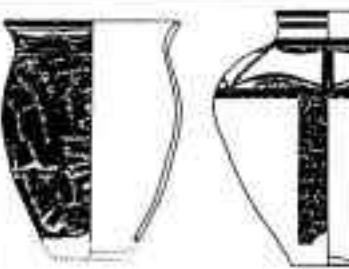
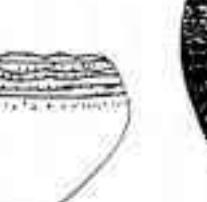
（島田）

時期区分		I 阿武隈川流域	II 名取川流域	III 北上川下流域	IV 北上川下流域
晩期	6期	鹿野	大洞A'式	大洞A'式 (山王IV下層出土土器)	牧野II
弥生時代	前期	1期	+	十三塚	山王IV上層式
		2a	薬師堂	カラト塚	青木畠式
		2b	+		山王III層式
	中期	3期	鱸沼式	船戸前・原	寺下囲式
		4a	楕形囲式	楕形囲式	楕形囲式
		4b	円田式	+	境ノ目A式
		5期	十三塚式	崎山囲式	崎山囲式
	後期	6期	天王山式	天王山式	上の原式
					鳥海山

第2表 編年表 (須藤隆 1998)

河内 (寺沢・藤井89) (藤田・松本89, 90)	大和 (福島・増山89, 90)	加賀 (石黒・宮腰95)	濃尾	三河	駿河	南関東 (後期=安藤96)	北信	福島	宮城/岩手	青森	道南 (高橋84)	道央 (高橋84)	道東 (熊木87.00)
船橋													
I-1	I-1		馬見塚 I-1			[杉田]			大洞A ₁ 古 大洞A ₁ 新 大洞A ₂ 大洞A'				緑ヶ岡
2			2	樺王			氷I						
3	2		3	水神平1									
4	II-1a		4	2	堂山1	[針塚]	御代田	福浦島下層	砂沢	[油駒]	フシコタン下層		
II-1	1b 2		II-1 (朝日)2	水神平3	2	[宮崎3次] [新諫訪町]							
3	3a 3b	矢木ジワリ 八日市地方6	3	岩滑	丸子	平沢	滝ノ森	原/山王III	二枚橋	[下添山]		興津	
III-1	III-1	7 (貝田町)2	III-1 8	[篠束] 瓜郷下層	遊ヶ崎 中里	[松節M21] [松節M16]	竜門寺 南鶴山2	田舎館1	アヨロ1 2	江別太7層 6層			宇津内IIa I
III-2	III-2		3 4 5	瓜郷中層	[長伏] 宮ノ台1	栗林1 栗林2古	ニツ釜	樹形1/+ 樹形2/+	3	アヨロ2b 江別太1(後北桔)			
IV-1	3 4	機部運動公園	IV-1		[長伏六反田] [向原]	2前 2後 3 4	栗林2新 河原町口 御山村下	[境/目] 橋本 [大石平]	アヨロ3a アヨロ3b	江別太2(後北桔) 宇津内IIa II			
5	IV-1 2	善光寺 戸水B	(高蔵)2 3	長床	[瀬名13a]								
V-0	V-1 2		V-1 (山中)2	[東光寺SD11]	後期I II III前 III後	吉田	和泉・能登 天王山	常盤		江別太3(後北A新) 坊主山1(後北B古)			
2	VI-1	猫橋	3	[東光寺SD10]	登呂1					坊主山2(後北B新)	宇津内IIb I		
3						2	箱清水1 2	湯舟沢 屋敷	[千歳13]	坊主山3(後北C ₁)	宇津内IIb II		
VI-1	3	法仏1	4	[東光寺SD08]									
2			5										
庄内0	4	月影1	VI-1	欠山1	飯田1	IV							
1	庄内1	月影2	2	2	2	V	3	赤穴					
2	2	白江	3	3	2								

第3表 編年表 (石川日出志 2003)

年代 BC 300	遺跡名 平裏 (秋田市)		
	地蔵田目 (秋田市)		
前期 100	瀬ノ沢A (秋田市)		
	横長柄A (若美町)		
中期 AD 100	宇津ノ台 (大曲市)		
			
後期 300	(志穂沢 (若美町)) 老井窯 (雄勝町)		
	十三塚 (雄物川 町) 三十刈工 (男鹿市)		

第4表 秋田県の弥生土器編年表 (富樫泰時 1987)

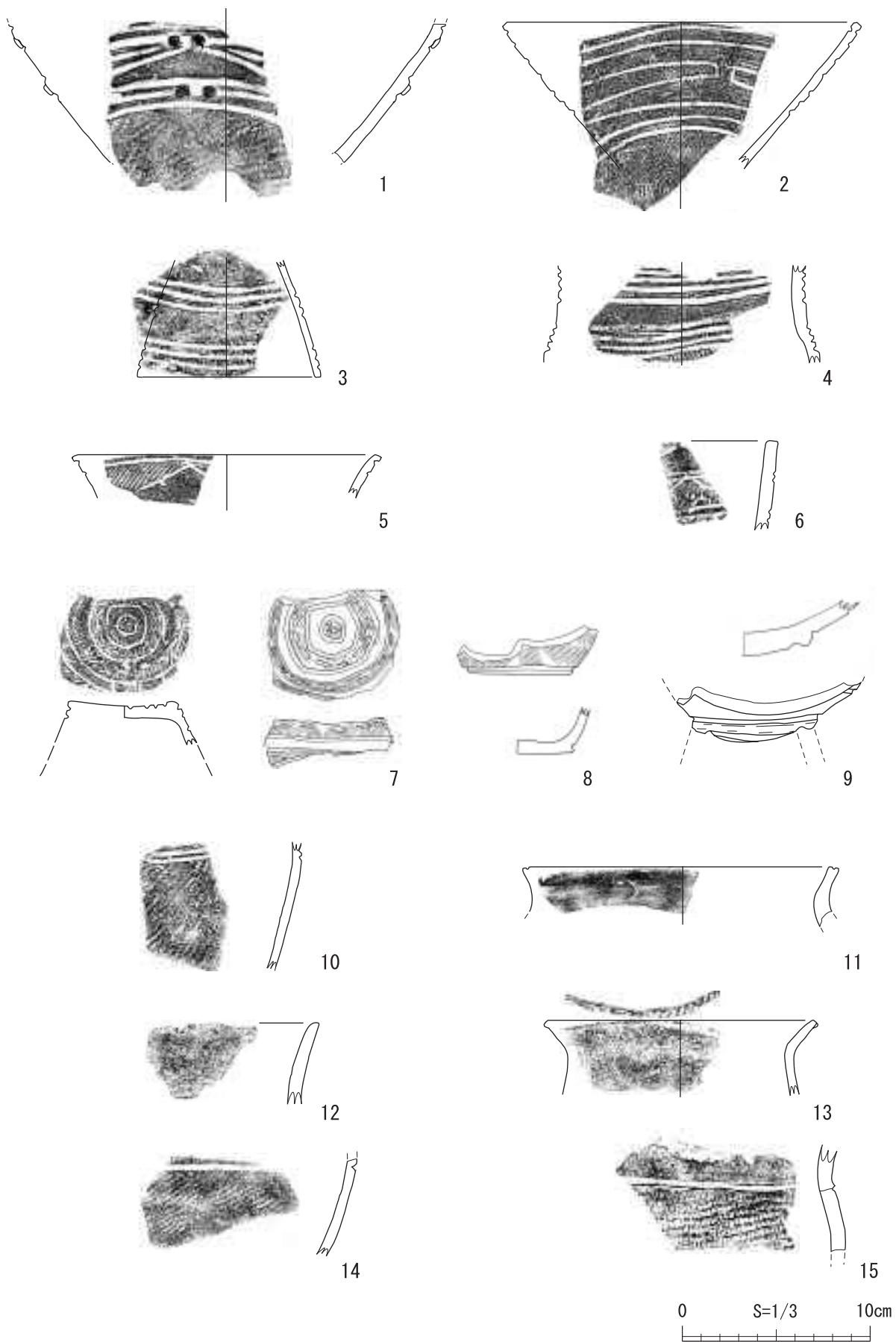
V 十三塚遺跡の出土遺物の検討

従来知られている土器（第5図22.23；奈良・豊島1969）以外の大部分が破片資料であるが、一部器形を復元できるものがある。時期・器種とも一通り揃い、他遺跡との比較が可能である。以下、数字を付す場合は各図版に従い、第3図（1～15）・第4図（16）・第5図（17～23）の順序に記す。

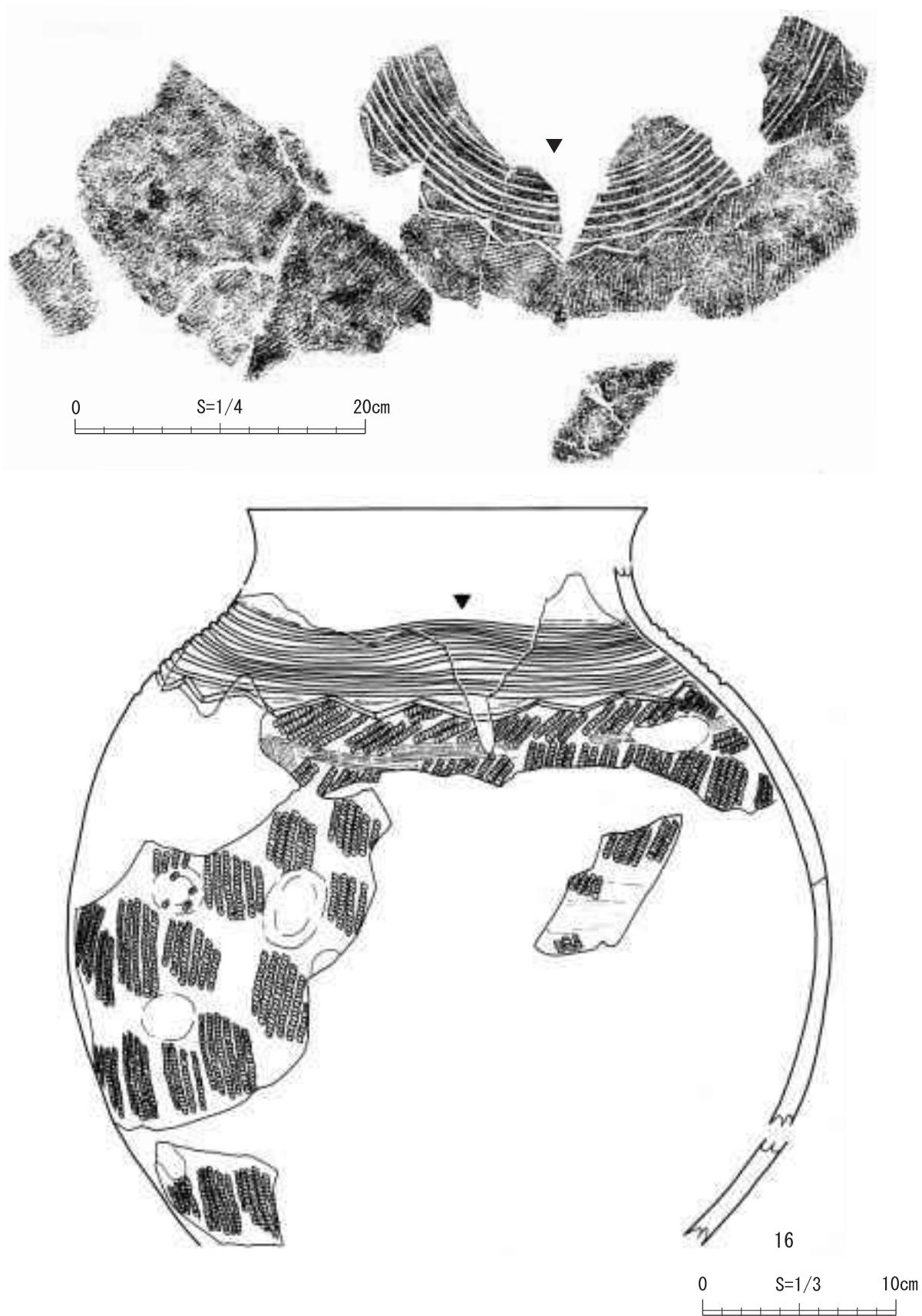
1は典型的な一段構成の変形工字文を有する浅鉢形土器で、おそらく平縁・すぼまる底部をもつ器形となろう。青森県のものに比較して胎土が粗く殆ど磨かれていない。2は「変形工字文C 2型」（須藤1983）を有する台付鉢の鉢部である。工字文の三角形内部のみ縄文が残されるほかは磨消縄文手法が用いられているが、徹底されておらず一部残る。沈線は断面三角形であり1と比べて細く、LR縄文は撫りが強く粒が小さい。なお内面の口縁直下に糲圧痕が一つ確認される。^(註5)3は平行沈線文が配される台付鉢の台（脚）である。器壁が薄い・金雲母が混和されるという特徴がある。4はやや小さい鉢形土器になると考えられ、多重沈線（4条）間に無文帯を作り出した筒形の頸部破片になろう。胴部以下には縦方向のRL縄文が施される。5.6は連続山形文を有する浅鉢形土器であり、磨消縄文手法を用いて山形文の下方はLR縄文を磨消す。7の蓋形土器にも磨消縄文手法が用いられ、LR縄文帯・無文帯の重畠を形作っており、各々の縄文帯には列点文を充填しベンガラ塗彩している。列点文は角形の工具による刻目であり、平行沈線も同一の工具によって施されている。8.10は浅鉢で、LR縄文を施す胴部に平行沈線を引いている。9は台付鉢の鉢部底であり太い沈線を2条引いている。底が円盤状であり角形の工具によって調整されている。胎土が精良で混和物も少ない。11～15はそれぞれ深鉢の口縁部・胴部であるが、形態には数種類ある。口唇にLR縄文による圧痕を施し、くの字外反する13が特徴的である。

16は口縁・底部を除いておよそ全体の1/3程度の破片が残る大形の甕である。口頸部は無文で外反するものと思われ、胴部の上半でやや膨らみ球胴形となる。直下には多重平行沈線（8条）とそれに沿う形で連続山形文が施され、また山形文の上方は磨消されている。山形文の直下にはLR斜縄文が施されるが、胴部下半には縦方向のLR縄文が施され、両者の間はヨコハケ・ヨコナデで調整されている。胴部には磨耗痕が目立ち胎土は粗製であり、沈線は丸形の断面をもち浅いのが特徴である。17は口縁・胴部破片から復元した壺である。外反する口頸部は無文であり器厚が一定に保たれ、口唇に平坦面を作り出しLR縄文を施す。以下の胴部にはLR縄文が施される。18.19は壺の口縁部であるが、肥厚の度合いなどからやや古手のものと考えられる。20.21は甕もしくは壺の底部であるが、20の内面に観察できる縦方向のハケメが特徴的である。

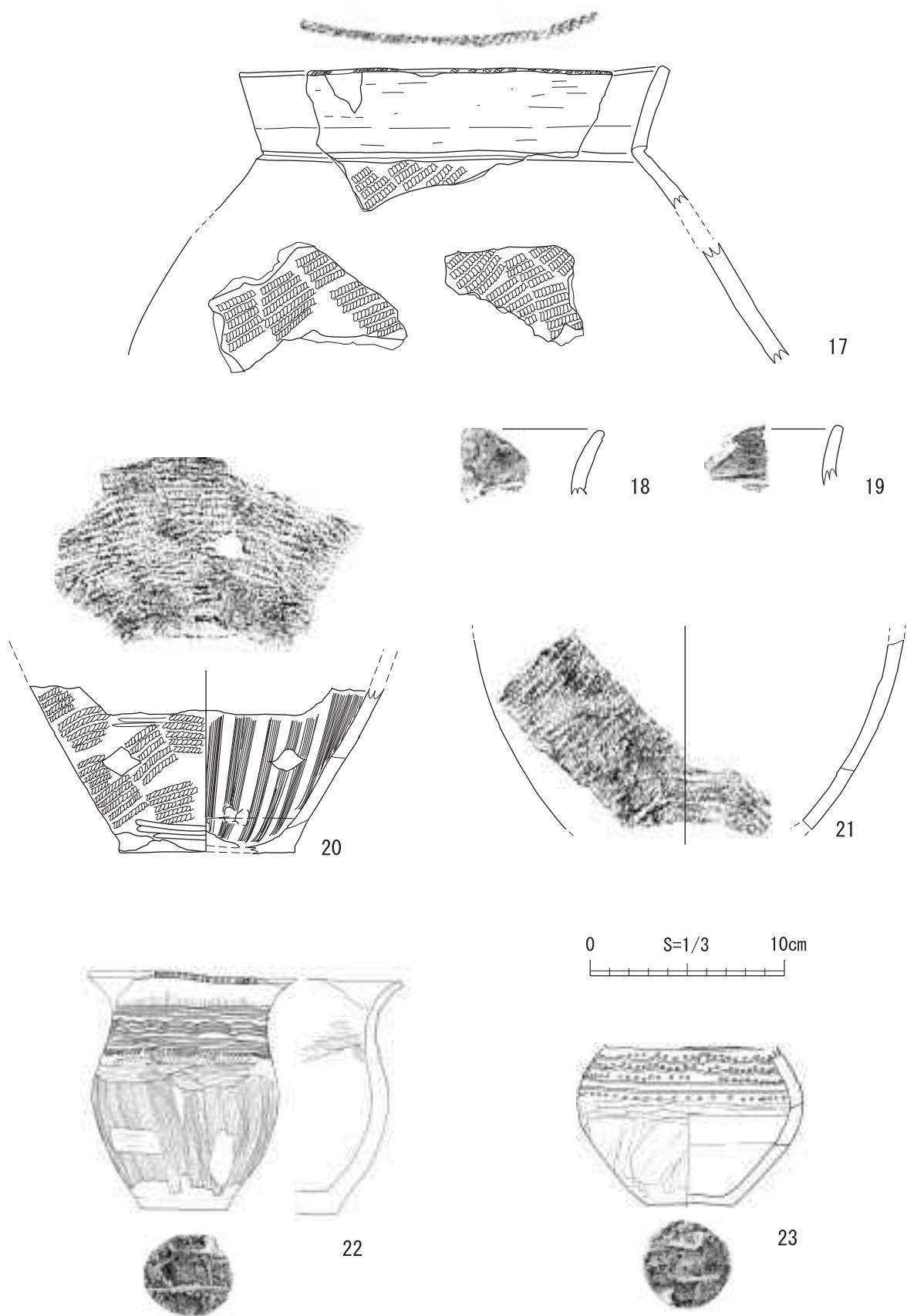
22は、口縁の1/3程度が欠失するほぼ完形の甕である。胴下半の厚みある作りに比べ、口縁部は器壁が薄い。口唇は面取りしLR縄目圧痕が施される。頸部の文様帯には3条単位の櫛により平行線文・弧文が左から右の方向で描かれるが、途切れや描き直しが観察できる箇所があり厳密な規則性は感じられない。2条ずつの施文単位であり、部分的に1条単位で描き足したと観察できる。直下には刺突（同一工具の櫛であろう）が巡る。調整との新旧関係は、①上から下という方向でハケメ→②櫛描文様→③左から右の方向でミガキ（ハケメを消す）である。特に櫛描文様直下のミガキは顕著である。23は口縁全体が水平に欠失する小形壺である。対面する両側上端に丸く穿孔されていることから、故意に打ち欠かれた所産とみて良いであろう。上部の文様帯には、2条ずつの平行沈線・弧文が左から右の方向で描かれるが、途切れ・単位のずれがあり同時施文とは考えにくい。内部には丸い刺突が充填さ



第3図 十三塚遺跡出土遺物（1）



第4図 十三塚遺跡出土遺物（2）



第5図 十三塚遺跡出土遺物（3）

No.	注記	器種	部位	色調	胎土	文様	調整	備考
1	S30	浅鉢	胴	黄灰褐色	雲母・炭化物粒を少量、金雲母を微量混和	変形工字文・LR縄文		注記は東里字内配蔵(石橋)とも記載。
2	S49. 6. 7	浅鉢	口縁	(外) 黄褐色 (内) 黒褐色	径1~2mm前後の砂礫を少量混和	磨消縄文手法による変形工字文・LR縄文	内面ヨコナデ	黒斑・ベンガラ塗彩
3	S49. 6	台付鉢	台	橙褐色	径1mm以下の砂粒を多量・金雲母を少量混和	平行沈線	表面ヨコナデ	
4	S49. 6	鉢	胴	暗褐色	雲母・ローム粒を少量混和	多重平行沈線・RL縄文	内面ヨコナデ	段あり
5	S49. 6. 7	浅鉢	口縁	(外) 明褐色 (内) 暗褐色	ローム粒を少量混和	磨消縄文手法による山形文・LR縄文	内面ヨコナデ	
6	S49. 6	鉢	口縁	黄褐色	径1mm以下の礫を多量に混和	平行沈線・山形文	内面ヨコナデ	ベンガラ
7	S49. 6	蓋	底	(外) 茶褐色 (内) 暗褐色	径1~2mm前後の砂・礫を少量混和	磨消縄文手法によるLR縄文帯の重複・列点文の充填		縄文帯の部分にベンガラ
8	S49. 6. 7	浅鉢	底	暗褐色	径1~2mmの礫を少量・雲母を多量に混和	LR縄文		ベンガラ
9	S49. 6	台付鉢	胴・杯	灰褐色	混和物なし	LR縄文		円盤状の杯部・ベンガラ
10	S49. 6	鉢	胴	暗褐色	径1mm以下の礫を多量・金雲母を少量混和	LR縄文	内面ヨコナデ・外面ヨコハケ	
11	S49. 6. 7	甕	口縁	黄褐色	径1mm以下の砂粒・海綿状骨針を多量に混和	口唇に沈線	内面ヨコナデ	
12	S49. 6. 7	甕	口縁	(外) 暗褐色 (内) 茶褐色	径1~3mmの礫を多量に混和		内面ナデ	
13	S49. 6. 7	甕	口縁	(外) 黑褐色 (内) 暗褐色	径1mm以下の礫・雲母・ローム粒を少量混和	口唇にL R縄文圧痕	内面ヨコナデ	
14	S49. 6	甕	胴	暗黄褐色	径1mm以下の砂粒・金雲母を多量に混和	平行沈線	内面ナデ	
15	S49. 6	甕	胴	(外) 明褐色 (内) 暗褐色	径1~2mmの礫を多量・石英を少量混和	平行沈線	内面ヨコナデ	
16	S49. 6. 7	甕	胴	黄褐色	径1~2mmの礫・炭化物粒・酸化鉄粒を多量に混和	多重平行沈線・山形文、胴部にLR縄文	ヨコナデ・一部ヨコハケ	
17	S49. 6	壺	口縁胴	暗黄褐色	径1~2mmの礫・雲母を多量に混和	口唇・胴部にLR縄文	ヨコナデ	
18	S49. 6. 7	壺	口縁	(外) 暗褐色 (内) 茶褐色	径1mm以下の礫・雲母・を少量混和	平行沈線	内面ヨコナデ	
19	S49. 6. 7	壺	口縁	(外) 暗褐色 (内) 茶褐色	径1mm以下の礫・ローム粒を多量に混和	平行沈線		
20	S49. 6		底	(外) 暗褐色 (内) 黒褐色	径1mm以下の砂粒・ローム粒を多量に混和	LR縄文	内面 タテハケ	
21	S49. 6		底	黄褐色	海綿状骨針を多量・雲母を少量混和	LR縄文	内面ヨコナデ	
22		甕	口縁一部欠	暗褐色	径1mm以下の砂粒混和	櫛歯による平行線・3条の弧文、直下には刺突文	(外) タテハケ→ミガキ、(内) ヨコハケ→ナデ	
23		壺	口縁欠	黒褐色	径1mm以下の砂粒混和	平行沈線(2条)・連弧文(2条)、間を刺突で充填	(外) 縦のケズリ→縦のミガキ、(内) ケズリ→ヨコナデ	文様部分には朱彩

第5表 十三塚遺跡土器観察表

れ、一部沈線を切る箇所があるが不規則である。内外面ともケズリで成形し、ナデ・ミガキで調整を加えている。22.23とも精製された胎土で光沢があり、特に23は黒色化が著しく文様部分は赤彩されている。また両者とも底面に沈線による図形が描かれている。いずれ小形土器であり、煮沸など日常の用途に使用されたとは考えにくい精製土器と言える。

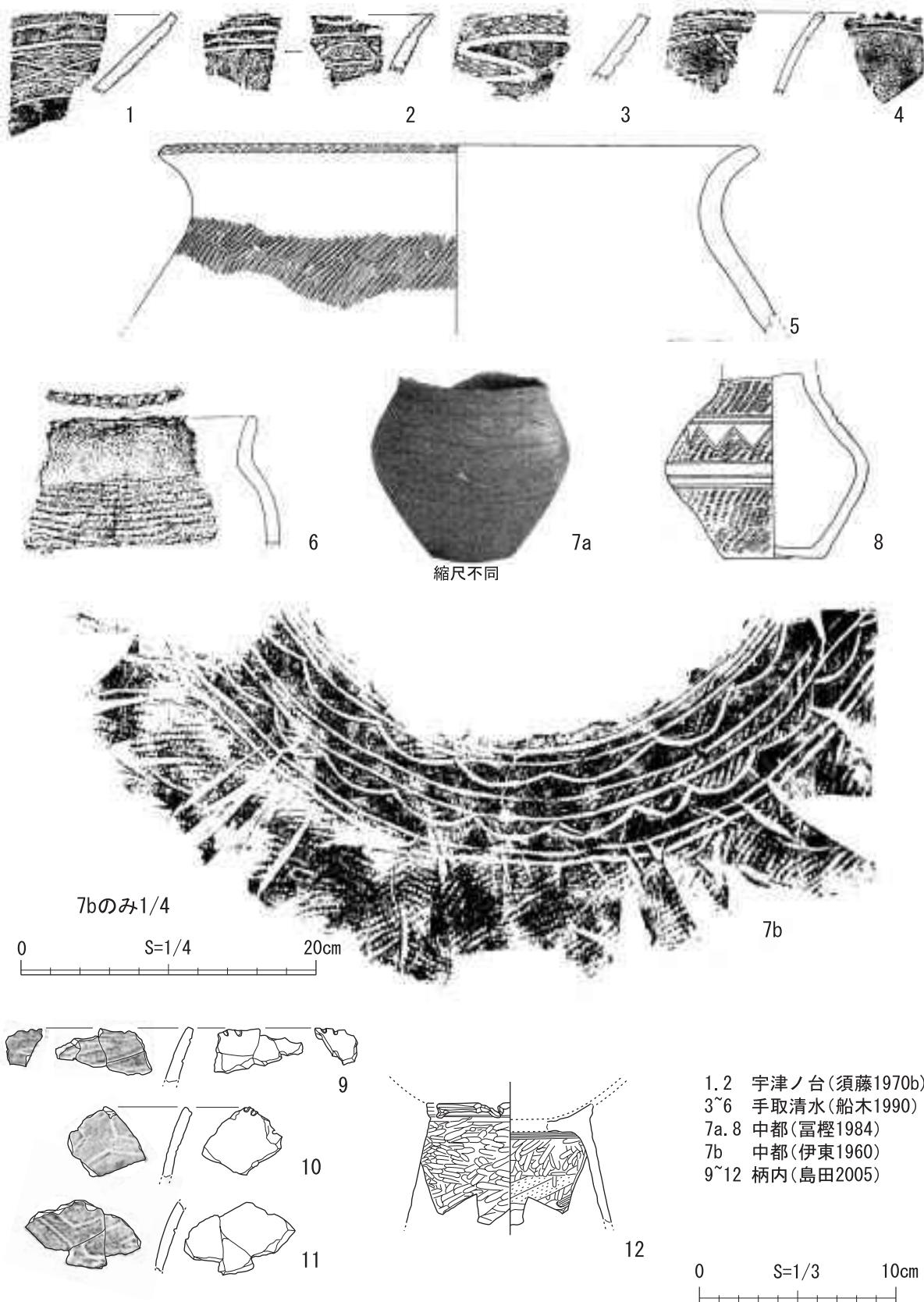
(根岸)

VI 編年的考察

結論から先に述べると、1が砂沢式で弥生前期に比定されるほか、2～21が弥生中期、22.23がそれ以後（中期末～後期初頭）に帰属する資料であると考えられる。1が廻館II遺跡、2～21が十三塚I遺跡、22.23が廻館I遺跡出土であるから、ほぼ同一の遺跡群の異なる地点で弥生前・中期・後期の破片が採集されていたことになる。以下、周辺の他遺跡と比較することで各土器のおおよその時期的位置を定めていくが、特に東北地方北部における弥生中期の編年は未だ定まっていない状態であり、ここで新たに在地の型式名の設定を試みるものではない事を明記しておく。なお以下で使用する時期区分は広域編年の視点（石川前掲）に立っており、須藤隆氏の設定した前期後半を中期前葉とするものである。

2.3は宮城県における山王III層式（須藤1983）・或いは岩手県における谷起島式（鳥畠1955）に類似する中期前葉の資料である。2は磨消繩文手法の存在から横手市手取清水2群（船木1990）よりも新しいとも考えられ、或いは中葉に食い込むかもしれない。3は波状文がなく平行沈線のみで構成される点が岩手・宮城のものと異なる。4に類似する資料は志藤沢遺跡など主に日本海側に少数出土しており、二枚橋式（須藤1970a）の深鉢と比較することができる。5.6は連続山形文の存在から手取清水4群と比較できる。7のような文様構成・器形の、蓋の類例は県内・県外とも少ない。ただし繩文帯に列点文を充填する手法は、日本海沿岸地域で横長根A・志藤沢遺跡、近くでは大仙市宇津ノ台遺跡I群（第6図1.2；須藤1970b）、手取清水遺跡4群（第6図3.4：船木1990）、県外では北上川流域（例えば火行塚遺跡；高橋1981）にも見られる。円形の刺突の場合も含めると広い分布範囲を示すようであり、およそ中期中葉～後葉の幅で捉えられる資料であろうと考える。11～13.17は無文・ナデ整形の長めの口縁部から手取清水遺跡の甕（第6図5.6）と比較できる。16は宇津ノ台・手取清水両遺跡に比較できる適例がなく、多重沈線と連続山形文からなる文様構成は、むしろ平鹿町中都（伊東1960・富樫1984；第6図7.8）、湯沢市木津根崎・弁天野尻（山下・茂木1965）など狭い地域に存在するようであり、在地土器の特徴を表したものと見てよいであろう。かつては宮城県の桟形式や青森県の田舎館式との類似を説かれた土器群であり、文様帯の幅・連続山形文の存在から見て中期後葉のものと捉えた。ちなみに雄物川町柄内遺跡（島田2005）では磨消繩文手法を用いた菱形文を有する精製鉢（第6図9～11）が出土しており、同じく中期後葉に相当するものと考える。^(註6) 横手盆地に一般的な文様構成であり、志藤沢式とも比較できる。

16から22.23への文様構成の変化は、間に数段階を挟むとしても、連続山形文から櫛歯による弧文への変化・沈線を描く工具の変化（細線化）という文脈で辿る事ができると考える。22.23とも2条施文を単位としており、雄物川最上流域の岩井堂洞穴遺跡（奈良ほか1963）出土の竹管状工具で連弧文を描く例と類似する。残念ながら、秋田県内ではほかに類例を求める事ができない。22.23の土器は從



第6図 横手盆地内の弥生土器

来、小坂町周辺の交互刺突文系土器群に並行するとされ（橋1979）、弥生後期の範疇に入れられてきた（富樫1987）。しかし宮城県において中期後半の土器型式とされる（石川2003）崎山団式（伊東・伊藤1965）と文様表出技法が類似することを考慮すると、中期末葉に帰属する可能性も排除すべきでない。^(註7) いずれにせよ十三塚遺跡を含む横手盆地において、弥生中期の土器群を検討してこそ明らかにされるべき問題である。ここではこれらの土器群が、天王山式を生む母胎となった宇津ノ台式系統とは異なる系統上に位置づけられるものということを、重ねて強調しておきたい。

以上まとめると、十三塚遺跡では弥生前期～中期末（後期初頭）に渡る土器が出土していることを示した。資料数が少ないが、十三塚I遺跡は主に中期の土器群がまとまることが分かる。しかも従来の宇津ノ台・手取清水両遺跡とも様相が異なるようであり、当該地域在地の土器型式の一端を示しているようだ。IIで触れたように、弥生時代の横手盆地には幾つかの遺跡群が分散して存在しており、土器群の内容から見てもそれぞれが若干内容を違えている。各時期を画するメルクマールを、よその地域の土器ではなく在地の土器の中に求める努力が、今後必要となってこよう。

(根岸)

VII まとめ

従来、秋田県内の弥生土器研究においては、幾つかの別型式土器の要素が混在する様相が強調されるあまり、在来の伝統から生まれる土器のイメージが掴みにくかったように思う。日本海沿岸地域の例で言えば、地蔵田B遺跡に特徴的な弥生前期の遠賀川系土器（壺・甕）が、どのような変化によつて中期・後期の土器へと繋がるのか、説明がされてこなかったのが一つの現れである。

しかし近年、日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、弥生前期～中期の良好な資料が幾つか見つかってきており（高橋ほか2001・村上2003など）、また筆者が資料報告する志藤沢遺跡の内容が公表されるため、日本海側における弥生時代前期～中期の様相はかなり明確になってくることが期待される。県南部はまだまだ資料不足の觀が否めないが、本稿において後期の標識遺跡でもある十三塚遺跡が弥生前期～後期に渡る時期幅をもつことを示した意義は小さくないと考える。今後、小地域内で土器編年作業を積み重ねることで、在地の土器型式の内容を明らかにしていく必要がある。宇津ノ台式を新潟方面の土器型式（山草荷式）と同一視する見方（石川2004）もあり、それとは異なる様相をもつ十三塚遺跡出土土器が示唆する内容は、今後大きくなってくるであろう。

(根岸)

VIII あとがき

今回の報告の契機となった富樫泰時氏及び高橋学氏、有益なご教示を頂いた村上義直・利部修・石川日出志・品川欣也氏に感謝申し上げたい。

(島田・根岸)

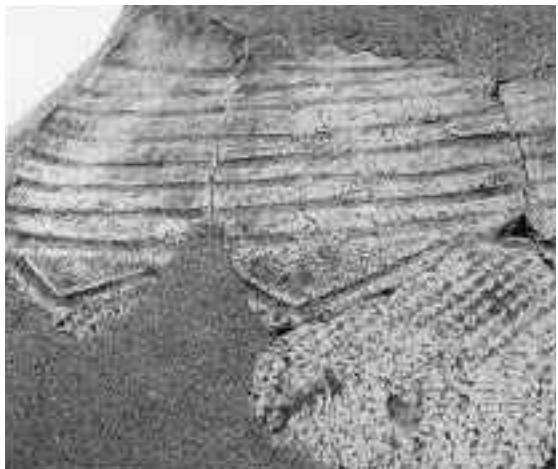
註

1. 今回報告する十三遺跡の実測図・拓本は根岸が行った。図版は島田と根岸がAdobe社Illustrator10.0及びPhotoshop7.0を利用し作成した。これらの編集を島田が行った。
2. 以下で用いる弥生中期の区分は、およそ須藤1998の編年觀に拠っている。ただし広域編年上、筆者は須藤氏の弥生前期後半(2a・b)を中期前葉とする立場に立っている。なお手取清水遺跡の報文において、2群が山王Ⅲ式、3群が寺下圓式、4群が宇津ノ台Ⅰ群、5群が宇津ノ台Ⅱ群と比較できるとされている。主に磨消繩文手法・文様構成を根拠にした分類であるが、弥生中期前葉・中葉の土器型式が横手盆地にないことも如実に示している。
3. 宮崎進「秋田の十三塚考」『出羽路15号』秋田県文化財保護協会1962。神奈川大学日本常民文化研究所『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第10集 十三塚』平凡社1985。十三塚という地名は、ここのみならず全国的に見られ、宮城県には同じ弥生遺跡である十三塚がある。十三塚そのものについては、『秋田県の考古学』で羽後町十三本塚の調査の記録がある。10号塚の出土遺物は、宋銭13枚、人骨細片、経石477個であったことから鎌倉時代の火葬墓と推察している。昭和37年頃に発掘した結果、祝部土器が出土したとする(島田1980)。
4. 十三塚遺跡の弥生土器片は、元雄物川郷土資料館長島田亮三氏採集のもので、全てに出土地・年月(日)・島亮の注記が書かれている。
5. 採集当時のものとして、「高坏台部(小)の中に残されている土中より、糞殻と思われるものが発見された」という記述がある(島田1980)。
6. なお柄内遺跡では、9~11と異質な胎土・焼成の台付鉢が出土している(12)。明褐色灰色の胎土で橙褐色の火色が付着し器壁が薄く土師質に近いが、沈線が引かれる点が特徴的である。十三塚遺跡含め周辺遺跡には類例がなく、弥生時代でもかなり新しい時期に入ってくる事が予想される。類例の増加を待ちたい。
7. 須藤(1998)は岩井堂洞穴例を中期後半に位置づけている。
8. 『秋田考古学』第49号 秋田考古学協会(2005年10月刊行予定)に掲載予定である。

参考・引用文献

- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987
石川日出志「関東・東北地方の土器」「考古資料大観」第1巻 2003
石川日出志編「関東・東北弥生土器と北海道続繩文土器の広域編年」「科研費報告会基盤研究(B)(2)』
地底の森ミュージアム 2004
石川日出志「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」「駿台史学」2004
伊東信雄「東北北部の弥生式土器」「文化」1960
伊東信雄・伊藤玄三「崎山圓洞穴調査概報」「宮城県文化財調査報告書」8 1965
大和久震平・奈良修介『秋田県史 考古編』秋田県 1960
大和久震平『手取清水遺跡発掘調査報告書』横手市教育委員会 1974
雄物川町教育委員会『秋田県遺跡カード』(雄物川町) 1986
児玉準『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集 秋田県教育委員会 1983
児玉準「秋田県における弥生式土器の編年研究の現状と課題」「東北地方の弥生式土器の編年について」1988
小西秀典『星宮遺跡』仙北町文化財調査報告書第3集 仙北町教育委員会 1999
島田祐悦『水尻遺跡・柄内遺跡』雄物川町文化財調査報告書第8集 雄物川町教育委員会 2005
島田祐悦「十三塚遺跡」「遺跡詳細分布調査報告書」雄物川町文化財調査報告書第4集 雄物川町教育委員会 2003
島田亮三「1章 原始の生活 3節 弥生時代」「雄物川町郷土史」雄物川町役場 1980
須藤隆「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」「考古学雑誌」1970a
須藤隆「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」「文化」1970b
須藤隆「東北地方の初期弥生土器-山王Ⅲ層式土器-」「考古学雑誌」1983
須藤隆「第9章 東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」「東北日本先史時代 文化変容・社会変動の研究」1998

- 高橋義介「火行塚遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集 岩手県埋蔵文化財センター 1981
- 高橋忠彦他「小出I・II・III・IV遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集 秋田県教育委員会 1991
- 高橋学『和田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第212集 秋田県教育委員会 1991
- 高橋学他『井戸尻台I遺跡』秋田県文化財調査報告書第313集 秋田県教育委員会 2001
- 橋善光「弥生土器 - 東北 北東北3-」『月刊考古学ジャーナル』No.166 ニュー・サイエンス社 1979
- 富樫泰時「第2章 弥生時代の遺跡」『平鹿町史』平鹿町 1984
- 富樫泰時他『図説 秋田県の歴史』河出書房新社 1987
- 富樫泰時「第1章 原始古代 第4節 弥生時代と南外村」『南外村史』南外村 2003
- 富樫泰時「横手盆地の遺跡が語るもの 弥生時代・古墳時代の遺跡」『横手の遺跡と考古学』横手市史編さん連続談話会レジュメ 2004
- 富樫泰時「第3章 稲の伝播と秋田」『秋田市史第1巻 先史・古代通史編』秋田市 2004
- 鳥畠寿夫「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」『上代文化』25 1955
- 中村五郎「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編 1976
- 長山幹丸「協和町船岡字庄内岩屋山洞穴遺跡発掘について」1969
- 奈良修介・山下孫継・富樫泰時「雄勝郡雄勝町岩井堂洞穴遺跡発掘調査略報」『考古学雑誌』1963
- 奈良修介・豊島昂『秋田県の考古学』吉川弘文館 1969
- 船木義勝他「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V』秋田県文化財調査報告書第190集 秋田県教育委員会 1990
- 武藤祐浩「上猪岡遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書X』秋田県文化財調査報告書第208集 秋田県教育委員会 1991
- 村上義直『越雄遺跡』秋田県文化財調査報告書第357集 秋田県教育委員会 2003
- 谷地薰『五百刈田遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第194集 秋田県教育委員会 1990
- 山下孫継『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第16集 秋田県教育委員会・雄勝町教育委員会 1969
- 山田貞吉他『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集 秋田県教育委員会 1981



(番号は挿図番号に対応、縮尺不同)

写真1 十三塚遺跡出土の弥生土器